

神輿と若講中の考察

福島に他村に無いような貴重な「御文」がある。

明治七年に本願寺上人の現如が「大法興隆」を願って、一年近くの長い間、印度などや世尊の遺跡を周歴しての報告を兼ねた「お文」である。現物は、現在公民館の仏間に大事に安置されているが、その御文を貰ったのが、当時「若講」を結んでいた福島の連中であることが分った。

「御文」に付随して、残されている本山に対する上納金は僅かなものであるが、明治二十二年から、大正六年に約四十回に渡っている、受け取りがある。

想像であるが、若講中の連中が本願寺に参詣する度に上納したものだと思われる。

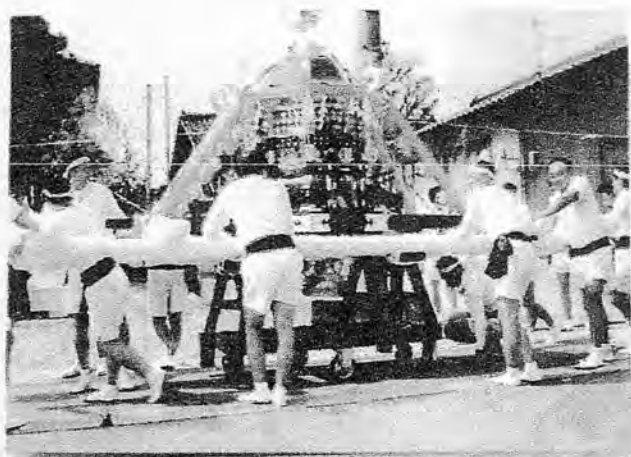
それは、若講中宛は二十二通、個人名のもものは、高塚松次郎・四郎兵衛・市郎右衛門、四・武右衛門、四・今右衛門・今右衛門・福田・清七、二・仁右衛門・宗右衛門・姓のあるものは吉岡七兵衛・福田又次・米沢富男・吉藤松次郎。などである。

個人名があるものは、必ず「取り次」と書いてあるので、個人名の人預かつて、本願寺に上納したものであろう。

福島のお神輿は、安宅住吉神社にあったものを分けて貰って使っていたが、今年写真のように修理し、面目を一新した。

何処のものであったかは、安宅住吉神社にも経緯が不明であると聞いたが、前記の「若講中」の面々が、手に入れたものに違いないと言うのが、この「福島の歴史」を書くために集めた史料から生まれた私の想像が、日に日に確信に満ちてくるのが抑える事が出来ないのである。

福島での「若講中」が、田の神を現在地に移した、面々であるから尚のことである。



完